



# シダの縄

富山県埋蔵文化財センター

## 小竹貝塚の縄

低湿地貝塚である小竹貝塚からは、多くの木製品のほか植物質の遺物も見つかっています。これらの中には、シダ植物に撚りを加えて作った縄があります。縄自体が縄文遺跡から出土することは非常に珍しく、現在、県内では小矢部市桜町遺跡でしか類例を見ることが出来ません。

出土した小竹貝塚の縄は土器の施文に使われるような細い紐ではなく、幅 10～15 mmのやや太い縄で、縛ったり吊り下げたりするのに使う生活道具の一種と想定されています。樹種同定により、素材はリョウメンシダの葉柄(茎)を撚ったものであることがわかっています。また放射性炭素年代測定を実施しており、 $4,738 \pm 27\text{yrBP}$  (暦年較正年代(1 $\sigma$ )、縄文時代前期末葉～中期前葉頃)との年代が得られています。



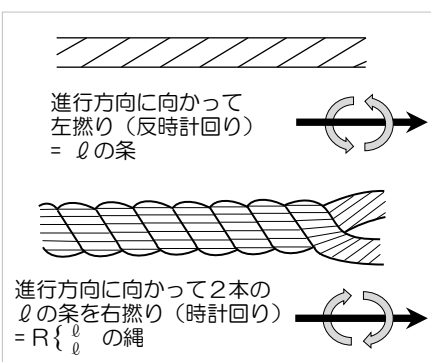
縄 (遺物番号 3194、C地区 363 グリッド、貝 14 層出土)  
C 地区を中心に縄の断片が多数出土しています。大半が幅 10～15 mmの太い縄類です。リョウメンシダの葉柄を撚ったものです。



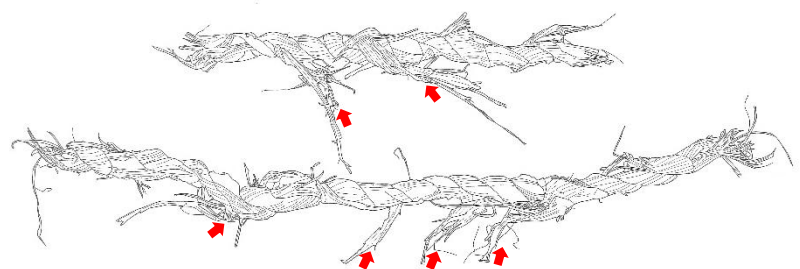
リョウメンシダ (オシダ科カナワラビ属)  
谷沿いの林床や湿った斜面に自生します。葉の表裏の質感が似ていることからこの名が付いたと言われます。大きく育つと葉柄が 1mを超えることもあるようです。茎は強靱ですが、根元近くから手で摘み取ることが出来ます。

## 縄の構造

考古学における縄の撚り方は、R(Right=進行方向に向かって右撚り)と L(Left=同・左撚り)で表されます。小竹貝塚の縄(遺物番号 3194)は、2本の繊維束(条)を撚り合わせて作った R の縄です。端部を詳しく見ると、条の撚り方向は2本とも左撚り(0段 $l$ )であることがわかります。更に R の縄を構成する2本の条の間から別の条が出ており、この条の撚り方向は縄を構成する条とは逆の右方向(0段 $r$ )に撚られていることに気づきます。どうやら単純な縄ではないようです。



縄の撚り方模式図



縄 (遺物番号 3194)  
左撚りの条が2本撚り合わさって右撚りの縄を構成しています。更に条と条の間から別の条(➡)がとび出しています。この条は縄本体の撚りとは逆方向の右撚りです。

## シダを撚る

この縄がどのように作られたのかを知るために、採取したシダを実際に撚って縄を作ってみます。

シダは日陰で数日間乾燥させ、葉が縮れてきたら指でしごいてこそげ落とします。葉柄(茎)だけになったら、これを束にして手のひらで撚りを加えていきますが、このままでは硬くて作業しにくいので、よく湿らせて石で軽く敲き、柔らかくしてから撚りました。縄の樹種同定をした担当者は葉柄について「割いたというよりも茎をそのまま潰して束ねたような印象」とコメントしています※1。

※1 高橋 敦 2014「木製品等の樹種」『小竹貝塚発掘調査報告』(公財)富山県文化振興財団



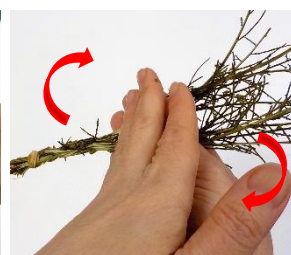
①乾燥させたシダを指でしごき、葉を落とします



②葉柄と葉に分かれました



③葉柄を水に浸してよく湿らせ、石で敲いて柔らかくします



④葉柄を束ねて二つに分け、手のひらで左方向の撚りを加えます



⑤縄から条をとび出させます。片方の束をふたつに分け、一方をよけておきます



⑥よけた束は縄の間から出すと安定します。葉柄を足しながら撚ります



⑦縄を撚り続けます。縄を撚り続けます。縄を撚り続けます。縄を撚り続けます



⑧完成した縄。4か所から条をとび出させました

## 縄からとび出た別の条

小竹貝塚の縄は本体から別の条が等間隔に出ています。この条は後から差し込んだものではなく、縄を撚る過程で、あえて条がとび出るように作ったものです。一定の間隔を持ち、本体とは逆方向に撚りを加えていることから、間違えたり失敗したりしたものではないことがわかります。この複雑な縄は、一体何を意味しているのでしょうか。

類例を探してみると、口縁部に縄の押圧を一周巡らせた縄文土器があります。縦方向にも縄の押圧をするものがあり、土器に注連縄をかけたようにも見えます。ちなみに現代のしめ飾りには、注連縄に藁を結んで垂らす藁垂(わらしで)を持つものがあります。小竹貝塚の縄に似ているでしょうか。

海外に目を向けると、古代アンデスにおける「キープ」と呼ばれる紐は、暗号化した情報を記録し伝達する手段だったことが知られています※2。これは1本の紐にいくつもの結び目をつけた別紐を何本も結び付けたものです。小竹貝塚の縄はどのような縄だったのか、想像がふくらみます。(朝田亜紀子)



縄を押圧した縄文土器(右は□部分の拡大、▼が縄の押圧、富山市布尻遺跡、縄文時代中期) どちらの土器も口縁部に縄の押圧を1条めぐらせています。下の土器の拓本では縦にも4条の縄の押圧が確認できます。

※2 島田 泉 2018「文字を持たない文明? Civilization without a Writing System?」『古代アンデス文明展』